

経師の歴史的役割について

橋口 侯之介（誠心堂書店）

書物の歴史上経師きょうしのはたした役割はきわめて大きかった。にもかかわらず経師と書物についての論考は少なく、まだ十分にあきらかにされたいとはいえない。私はその存在を本屋の起源と考えており、大いに見直すべきだと思っている。現代でも「経師屋」として掛け軸などの表装をする店はあるが、それは長い歴史の中でも一部に過ぎない。実はもともと多くの仕事をしてきたのだ。

その起原は奈良時代にさかのぼる。八世紀、写経は壮大な国家事業だった。この仕事に従事する者を経師といい、仏師、画師と並んで官人として遇されていた。『正倉院編年文書』によれば、たとえば天平十一年（七三三）四月十五日、「法華経七百九十二卷」を写経するにあたって、「合九十四人、七十八人経師、六人裝潢生、十人校生」とあって、九十四名を動員したが、そのうち七十八人は写経に従事する書生、写書手などでこれを経師といった。そのほかに、六人の裝潢生そうこうがいたとある。この裝潢が実は平安時代以降は経師と呼ばれるようになって多岐にわたる作業をしてきた者なのだ。

裝潢の主な仕事は、經典用の料紙を提供するために紙を染めて打ち、行間の線（界線）を引き、紙を糊で継いでいくことなどを行った。經典の本文ができあがると、軸装し表紙をつけて卷子に仕立てるところまで担った。

平安時代に入っても経師はその職掌を受け継ぎ、寺院に属して經典を製作するほか、禁裏や公家の書籍製作の仕事も請け負った。摺経といわれた印刷物にもかかわり、板木彫りや印刷も仕事に加わった。

この中で注目すべきは、紙を打つ仕事である。写経・摺経には不可欠な工程で、料紙を平滑にして墨が乗りやすいようにいったん漉きあがった紙をさらに加工した。その打つ作業を示す中世の画像があつて、『東北院職人歌合しやくごあひあわせ』（十二巻本、十四世紀頃成立）にそれが描かれている。次頁右の図が僧形の経師である。ここでは「思おもあまり露あせの夜すがら、かつ紙のをと（音）にたてても人をこひはや」と歌って、大きな槌のようなものを引き下ろして下に置いた紙を叩いている。

この道具を『日葡辞書にっぽし』では「saguzuchi、サグズチ 一本の長い竹に吊してある槌または杵で、紙で叩くのに使うもの」と出ていて、下げ槌といっていたことがわかる。

同じものが近世の本にも載っていて、図の左は元禄三年刊（一六九〇）の『人倫訓蒙図彙じんりんきんもうちゅう』の経師で、そこでも同じように上部が竹製でそこから吊るされた下げ槌を引き下ろしている。下にはかなり頑丈な盤（おそらく石だるう）があつて、何枚もの紙を重ねて叩いている。近世

右
 禊しとて一文字をこころしむるをいふ
 こころの月をあらはうとてわ
 思わすくとさるるに夜とてこころの月を
 なみよとてこころの人とこころのや



開板目録がつくられ、そこには個々の本に価格がついていて、紙の質とそれに伴う摺り代によって上品・中品・下品の三段階になっている。供養のために奉納される摺經と違って、これらは教学のために供する本であり、頒布される性質のものになっていたのである。その役割を高野

の本ではこのような図をいくつも見つけることができる。しかし、和紙研究で打紙が注目されるようになったのは最近のことである。下げ槌という用語も、作業そのものも近代以降忘却され、今ではこのような仕事をする職人はいないだろう。

経師の商人性

中世の経師で注目すべきことは、彼らがたんなる細工人ではなく、商人的な性格も有していたことである。

高野山では鎌倉時代に入ると真言宗の版本をつくるようになった(高野版)。早くから

山の経師が担った。作ることと売ることを同時にこなしていたのだ。この伝統は江戸時代にも及び、山中の版元は経師伊右衛門など数名の経師が存在していた。いわば本屋の始まりであった。

中世の商行為(交易)は市場のような特別な非日常的な場でおこなわれるが、寺院もそういう場であり、中世の職人は同時に商人だった。真言宗以外の経師も制作だけでなく頒布という商行為に手を広げていったことが想像できる。

『日葡辞書』に「*Calonjira* (キャウジヤ)。すなわち、キャウヒラキ、コシラエ、トヅルイエ。印刷所、または本屋」とあるのも経師が本を売る商人でもあったことを示しているよう。

曆の製作や頒布にもかかわりが古く、毎日の干支・吉凶・星宿などの記述をもとに卷子にした具注曆の制作は平安時代から経師の仕事だった。それが引き継がれて江戸時代まで曆の制作販売に関する権利は経師屋の専業とされた。京都の摺曆座は室町時代から続いた。

近世になって本屋が広がってくるさいにも、経師の系譜を引く者が少なからずおり伝統は続いていたが、職人としての性格は薄れていく。

一方、鎌倉時代に生まれた唐紙師が、布や紙を貼る表具師に変わっていき、掛け軸づくりが盛んになると、その制作をこの表具師と経師の双方が手掛けるようになった。そのため、しだいに表具屋と経師屋は混同され、経師屋はたんなる表装をする職人になってしまふ。現代ではそういう呼称だけが残り、本屋の起源とは想像もできなくなってしまう。